

学部留学生に対する 授業課題添削支援システムの構築に関する提案

—個別事例を手掛かりに—

磯田 静菜

【キーワード】

留学生支援、課題添削、アカデミックライティング、学部生

【要旨】

本稿は、今後さらに増加していくと予測される学部留学生へのサポート体制の一環として、新たに授業課題に特化したサポート体制である「授業課題添削支援システム」の提案とその構築可能性について実施をもとに考察したものである。さらに本稿では支援側を日本人学部生に限定することで、本システムにおいて日本人学部生が学部留学生を支援することは可能かどうかについても検討を行った。改善を要する細かい点はあるものの、学部留学生の授業課題において日本語の成長が見られたことや高い満足度を得られたことから本システムの構築可能性について結論を出し、実施に向けての提案を行った。

1. はじめに

文部科学省の外国人留学生在籍状況調査によると、2021年5月1日現在の外国人留学生数は242,444人であったことが分かっている¹。

図1は文部科学省が発表した外国人留学生数の推移である。コロナウイルスが流行しはじめた2019年度からは減少しているも

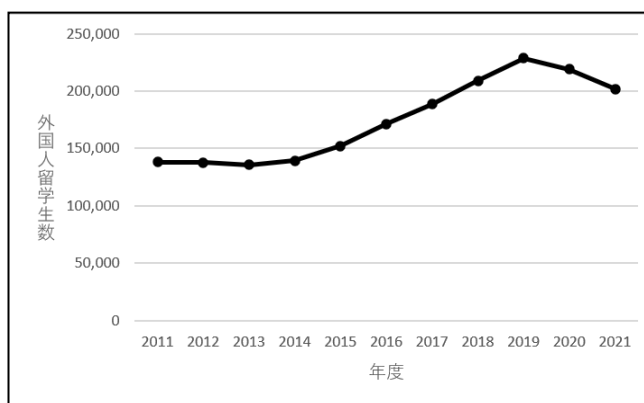


図1「外国人留学生数推移」²

¹ 『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」より。

https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_gakushi02-100001342_2.pdf

² 文部科学省から発表されたデータをもとに筆者作成。

の、全体としてみると増加傾向にあると言える。このことから今後状況が改善されれば再びまた留学生数が増加していくことが考えられる。

大学における留学生へのサポート体制は大学によって様々であるが、主に「チューター制度」「アカデミックライティングのサポート」「奨学金制度」の3つが挙げられる。「チューター制度」は生活面のサポートを中心に留学生本人のニーズに合わせ、幅広くサポートする有償のシステムである。「アカデミックライティングのサポート」は大学によって内容は異なるが、主に教師または大学院生がレポートの書き方などをサポートするシステムである。「奨学金制度」は一定の条件を満たす留学生に対して金銭的なサポートをするシステムである。これらの3つのサポート体制がすべて取り入れられている大学もあれば、1つだけを取り入れている大学、またまったく異なるサポート体制を取り入れている大学など様々である。

ここで今回焦点としている留学生の授業課題について考えてみたい。学部留学生の中には日本人学部生同様に毎回の課題を日本語で提出し単位を取得している学生もいる。考えたことが適切な日本語に変換できないことや日本語の誤用が原因で読み手である教師に自分の考えが伝わらず、結果的にそれが単位を取得するうえで不利を被る可能性は払拭できない。例として以下の(1)(2)を比べてみる。(1)と(2)はどちらも同じ授業を受けた後に課題とされたコメントペーパーとする。

- (1) 貧しい発展途上国の子供は学校という施設も知らないかもしれませんので、まともな教育すらできません。スポーツを通して人々の健康のみならず、心の健康も向上させますので、スポーツのやり方をその国の人に教えたいと思います。明るい未来を持たせるかと思えます。

(第14回2020年11月6日添削データ³)

- (2) 貧しい発展途上国の子どもは「学校」という施設すらも知らないくらいまともな教育を受けられていない可能性が考えられる。スポーツは人々の身体的健康だけでなく、精神的健康を向上させることが期待できるため、スポーツをその国の人に教えたいと思う。その活動を通して現地の子どもたちに明るい未来を持たせることができればと思う。

(1)は中国語を母語とする学部留学生が実際に書いた文章で、(2)は筆者が同じ内容で書くことを意識して作成した文章である。(1)も言いたいことや考えていることが伝わらないわけではないが、母語話者の書いた(2)に比べるとどうしても読みにく

³ 中国語を母語とする学部留学生1名を対象に2020年9月23日から2021年1月8日まで実際に本システムを実施した際の添削データである。実施概要については2-2節において後述する。

さがある。この他にも主語の欠落や母語話者にとって馴染みのない単語を選択することによって読みにくさが生じることも考えられる。そのような読みにくい文章の混ざった課題が提出されると、場合によっては何度か読み直す必要性や頭の中で誤用の訂正を行う必要性が生じることも考えられる。

このことから大学において学部留学生に対して授業課題をサポートする体制が必要であると考えられる。先に述べた大学における主な留学生へのサポート体制に含まれる「チューター制度」と「アカデミックライティングのサポート」で授業課題のサポートが可能かどうか検討してみると、まず「チューター制度」は有償のシステムであるのに加え、ニーズに合わせて幅広くサポートする制度であるがゆえに留学生側が課題の添削を依頼しない限りはチューター制度では補えないと考える。一方「アカデミックライティングのサポート」で期末レポートなどのチェックを依頼することはできても、教師または大学院生が留学生一人一人の授業課題を毎回添削するには時間的に厳しいと思われる。

以上のことから本稿では、前述した大学における留学生に対する主な3つのサポートに加え、「授業課題添削支援システム（以下「課題添削システム）」を学部留学生の授業課題に特化した支援システムとして新たに設け構築していくことを提案する。本稿では支援側を日本人学部生とすることで、学部留学生を日本人学部生が支援することは可能かどうかについても検討を行っていく。

2. 課題添削システムについて

まず先行研究で、本稿で取り扱うような学部留学生の毎回の課題を添削することでサポートを行うシステムについて取り扱われたものは見当たらなかった。そのため2-1節では課題添削システムの実施方法を述べ、2-2節で実施状況について、2-3節ではチューター制度との比較を通して課題添削システムについてより詳しく述べていく。

2-1 課題添削システムの実施方法

ここでは学部留学生をA、日本人学部生をBとする。まずAとBが大学の教師の紹介などを通じて「マッチング⁴⁾」をする。Aが毎回の課題をメールに添付してBへ送信する。Bはそれを添削し、返信メールに添付してAへ送信する。これを繰り返していくものである。

ここで注意すべき点として、AとBは他大学の学生である必要があると考える。同じ

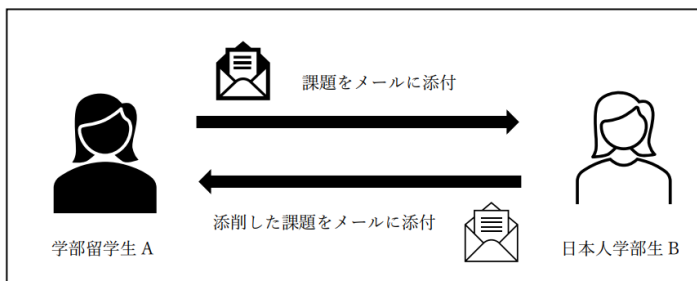


図2 「課題添削システムでのやりとり」

⁴⁾ 本稿では、添削を必要とする学部留学生と添削する日本人学部生がペアを組むことを「マッチング」と呼ぶ。

大学の場合、同内容の課題を同時期に行っている可能性や B が以前に同授業を履修しており課題内容を知っている可能性が考えられ、課題の添削が「答えの提示」になってしまう場合が考えられるためである。あくまでこのシステムのサポートは日本語の添削であり課題そのものや講義の理解度のサポートではないため、B は日本語にのみ注目して添削を行う必要があると考える。また B がどの程度の添削を行うかという問題に関しては、先ほどの (1) と (2) の例をもう一度見てみたい。

(3) 貧しい発展途上国の子供は学校という施設も知らないかもしれませんので、まともな教育すらできません。スポーツを通して人々の健康のみならず、心の健康も向上させますので、スポーツのやり方をその国の人に教えたいと思います。明るい未来を持たせるかと思えます。 (用例 (1) を再掲)

(4) 貧しい発展途上国の子どもは「学校」という施設すらも知らない可能性が考えられるくらいまともな教育を受けられていない。スポーツは人々の身体的健康だけでなく、精神的健康を向上させることが期待できるため、スポーツをその国の人に教えたいと思う。その活動を通して現地の子どもたちに明るい未来を持たせることができればと思う。 (用例 (2) を再掲)

(3) ' 貧しい発展途上国の子供は学校という施設も知らないかもしれないので、まともな教育すらできません。スポーツを通して人々の健康のみならず、心の健康も向上させるので、スポーツをその国の人に教えたいです。子供に明るい未来を持たせることができるかと思えます。

(第 14 回 2020 年 11 月 6 日添削データ)

(3) ' は実際の添削後の文章である⁵。今回の課題添削システムで行う添削は (3) を母語話者レベルの (4) にするものではなく、学部留学生の書いた文章を読み助詞の誤用や必要な部分での主語の脱落の発見、また読み手にとってすぐ読んで分かりづらい表現を指摘するなどして (3) を (3) ' のような文章にすることを目標とするものである。

2-2 実施状況

次に前節で述べた実施方法で課題添削システムを実際に筆者⁶が行った状況を報告する。

⁵ 以下ダッシュのついた用例は全てダッシュのついていない用例の添削後とする。

⁶ 当時の課題添削システム前の事前知識としては、概論程度の日本語学・日本語教育学の知識に加え、日本語学習者の書いた文章に含まれる誤用から日本語の文法について学ぶ「日本語の誤用分析」を履修しており、日本語学習者がどのような誤用を引き起こすのかについての簡単な知識は所持した状態で始めている。

表1 実施状況

学部留学生には課題をWordファイルでメールに添付して送信して	実施期間	2020年9月23日から2021年1月8日まで
	添削回数	全30回
	使用アプリケーション	Microsoft Word ⁷
	添削者	日本語学・日本語教育学を専攻する学部2年生(筆者)
	被添削者	他大学の中国語を母語とする学部留学生1名

もらい、Wordに搭載されている「校閲機能」の「変更履歴の記録」と「コメント」機能を用いて添削を行った。「変更履歴の記録」の機能を用いることで学部留学生が書いた文章を削除することなく訂正可能である点、さらに自動的に訂正箇所が赤字になる点から今回Wordで添削を行うことにした。「コメント」の機能は補足説明をする際に主に使用した。

続いて筆者が行った全30回の添削にかかった時間は以下の表2の通りである。

表2「添削文字数と時間⁸」

回	文字数 (字)	時間 (分)	回	文字数 (字)	時間 (分)	回	文字数 (字)	時間 (分)
1	293	8	11	1158	16	21	223	3
2	1034	24	12	453	8	22	1057	20
3	601	10	13	589	15	23	287	7
4	548	10	14	557	15	24	951	17
5	210	3	15	466	10	25	1654	18
6	635	10	16	863	15	26	1547	17
7	646	8	17	318	7	27	587	7
8	2754	33	18	721	11	28	2141	15
9	348	7	19	241	6	29	830	5
10	932	6	20	944	11	30	580	5

表2から、文字数が多いものはそれだけ添削時間もかかっているが全30回を平均すると添削にかかった時間は1つの課題に対して約11分であり⁹、最長でも33分、最短で3分で添削が終了したこともあることが分かる。

⁷ 以下「Word」とする。

⁸ 添削文字数には課題の題名や留学生の名前も含み、Wordの自動字数カウントの数字を表に記している。添削時間は読み始めから添削完了までをストップウォッチで計測し、30秒未満を切り捨て、30秒以上を繰り上げ表に記している。

⁹ 11.56分(小数点以下切り捨て)。

2-3 チューター制度との比較

次にチューター制度とこの課題添削システムとを比較することでこのシステムの特徴をさらに詳しくみていく。

1 つ目の相違点としてはそのサポート範囲である。チューター制度は留学生のニーズに合わせて幅広くサポートするシステムであり、そのサポート範囲内に授業課題のサポートや添削、日本語のサポートが含まれることも考えられる。一方で課題添削システムは学部留学生の授業課題に特化したサポートであり、一定期間内で毎回の課題を毎回添削する点に違いがある。またチューター制度は基本的に有償で行われることの多いサポートシステムでありチューターに報酬が支払われるが課題添削システムは完全無償で行われる点も大きな違いであると言える¹⁰。

2 つ目の相違点としては自由度で、課題添削システムはチューター制度に比べて自由度が高いことが考えられる。小林（2007）では、北九州市立大学の学部留学生と短期留学生及び担当チューターを対象としてチューター13名、留学生12名へのアンケートが実施されている。アンケート項目の1つである「困難点について」ではチューターから「時間が合う学生同士でマッチングしないと活動がしにくく、チューターになった意味がない」という意見が得られている。そこからチューター制度は対面で行うサポートであり、サポートを受ける留学生とチューターのスケジュールが合わせられなければ活動は困難であると言える。一方で課題添削システムはメールのやりとりによって行われるものであるため、実際に相手とスケジュールを合わせて会う必要がなく、自分の時間のあるときに質問や回答ができる点、添削データやメールの確認ができる点は添削側だけでなく、留学生にとっても利点であると考えられる。

以上2つがチューター制度と課題添削システムの大きな相違点である。

3. 実際の添削データを用いた考察

次に実際の添削データから本システムの利点について考えていく。

まず日本人学部生に対する利点としては日本語学や日本語教育におけるさらなる学びに繋がる可能性がある点、また日本語学を専攻していない生徒にとっても関心を持つきっかけとなる可能性がある点が挙げられる。

- (5) その資料もその場で読んですぐ理解できる文章で書くのが必須条件である
 (中略) それは行間を読むことで、人によって解釈の違いが*生じるからの
である。(中略) そのずれが時間によって大きくずれてしまう可能性があるため、本来の目的が達成できないのである。

(第3回 2020年9月25日添削データ 斜体下線筆者)

¹⁰ 現在大学では留学生支援に対する予算に限りがあり、新しく有償の支援を増やすのは容易ではないと思われる。その点でこの課題添削システムは意義があると考えられる。

(5) で「生じるからのである」の部分に誤用が生じていることは母語話者であればすぐに気づくかと思うが、この誤用がなぜ生じたかを考えてみると、斜体になっている誤用部分の前後にある「必須条件である」という「Nである」の形と「達成できないのである」という「V のである」の形においては適切に「である/のである」が用いられている。そのことから、動詞と「である/のである」の間に「から」という接続助詞が入ることで日本語学習者の誤用を導き出していると考えられる。実際に筆者が添削を行った際に「である/のである」の指導法に疑問を持ち文献を調べた結果、先に述べた予想に至ったのだが、このように学習者の誤用から新たな学びが得られる可能性があると言える。合わせてもう一例挙げる。

(6) 朝食は*便利を図るためパン一つで済む場合が多かった。

(第11回 2020年10月23日添削データ 下線筆者)

(6) は「便利を図る」と「便宜を図る」を混同したために起こった誤用だと考えられる。しかし単純にここで「便宜を図る」と添削しても内省から許容度の高い自然な文章には感じられなかったため「便宜を図る」の意味を辞書で引き、用例を確認した後に次の(6)'のように添削をした。

(6)' 朝食は便利なのでパン一つで済ませる場合が多かった。

このように母語話者であっても日本語を再確認するきっかけとなる可能性が考えられる。さらに「便宜を図る」と「便利を図る」の違いについてインターネット上の yahoo 知恵袋を使って質問している学習者が 2007 年と 2016 年に 1 名ずつ確認された。そのことから学習者にとって混同しやすいフレーズである可能性が考えられ、そのような気づきが日本語教育に関心を持つきっかけとなる可能性があると思われる。

2 つ目はメールでやりとりを行うことにより添削データを見直すことができる点である。

(7) 田舎から*大勢の人が*都市に集まり、いわゆる都市化が進み、隣人との距離が縮まったから。 (第2回 2020年9月24日添削データ 下線筆者)

(7)' 田舎から大勢の人が都市に集まる、いわゆる都市化が進み、隣人との距離が縮まったから。

(7) は「な」と「の」の誤用と「いわゆる」に前接する動詞の形に誤用が見られる。特に「いわゆる」に前接する動詞の形に関して Word のコメント機能を用いて以下の(8)のように補足説明を行った。

(8) 「いわゆる」はイコールの意味だと考えると分かりやすいと思います。「大勢の人が都市に集まる」＝「都市化」なので、ここでは「集まり」ではなく「集まる」となります¹¹。(第2回2020年9月24日添削データ)

(9) 一方、20代30代の若者は何らかの原因で結婚しない人の割合が増加しているため、子供の出生率が減っている、いわゆる少子高齢化が進んでいる。(第4回2020年10月1日添削データ 下線筆者)

(9) は許容度が低い文章であると捉える母語話者もいるかもしれないが、「いわゆる」に前接する動詞の形だけに着目すると以前の誤用をふまえて改善されていると言える。さらに(9)は第4回10月1日の添削データであることから、(7)の誤用が生じた第2回9月24日から時間の経過がさほどないことが分かる。このことから間違えてしまった表現を積極的に使用することで身に付けようとしているとも考えられる。次の(10)を確認したい。

(10) このような時によく使われる改善方法の一つはマインドフルネスである。マインドフルネスの瞑想をすることによって、集中力を高めたり、ストレスを減らしたりすることが*望まれる。(第12回2020年10月29日添削データ 下線筆者)

(10) の文章は「仕事、人間関係、子育てなどに追われる日々に心身に悪影響がでる」という内容の後に続くものである。文脈を考慮した結果、ここでは「望まれる」ではなく「望める」が適切であると考え、添削を加えた後に「望まれる」と「望める」の違いについて Word のコメント機能で以下のように補足説明を行った。

(11) 望まれる：他人からそうであってほしいと思われること
望める：「望むことができる」の意味
(第12回2020年10月29日添削データ)

(12) 実践中に、トレーニングの原則に注目し、漸進性と反復性を忘れずに全身、全体をバランスよくトレーニングしていくことが望まれる。
(第18回2020年11月20日添削データ 下線筆者)

(12) の文章は前後の文脈を考慮しても、「望まれる」が適切である。日付を見てみ

¹¹ この補足説明が日本語学的に適切であるかどうかについて疑問に思われる方もいるかもしれないが、あくまで当時は筆者の内省で添削・補足説明を行っていた点でご了承ください。

ると(12)は(10)の添削から約3週間経っており、(7)(9)とは異なり時間の経過があるにも関わらず改善が見られたと言える。そこから添削内容と補足説明が学部留学生に理解され、学習に繋がったことが考えられる。

以上のことから、添削データがパソコン上に残ることで一度添削された表現をまた課題で用いる際に復習ができること、及び添削内容や補足説明を繰り返し見直すことができるのは学部留学生にとって利点であると言える。添削側にとってもデータが残ることと同じ誤用を前にも起こしていないかを確認して補足説明を加えること、反対に以前の添削をふまえて改善されているところを発見できるため、相互にとってデータが残ることは利点であると言える。

4. 課題添削システム実施者目線の手ごたえ

次に実際に添削を行った筆者と、被添削者である学部留学生へのアンケートからこの課題添削システムについて考えていく。

4-1 被添削者と添削者の意見

まずは被添削者である学部留学生の意見から見ていく。今回の実施期間終了後、実際の被添削者である学部留学生にアンケートを行った。アンケートは記述式のAと選択解答式のBの2つを実施し、アンケート調査Aの結果からさらに質問したい内容をアンケート調査Bとして質問した。2節ではチューター制度との比較からメールでやりとりをすることで時間・空間を気にせずに作業ができる点、3節では添削データから、パソコン上にデータが残ることで復習や見直しがしやすい点が留学生にとっての利点となることが分かった。本節ではアンケートから2節・3節で取り上げられていない留学生への利点をみていく。

まず「正しい」日本語の課題を提出することができる点が挙げられる。ここで言う「正しい」とはあくまで必要最低限の文法的ミスが直され、読み手に伝わるという意味であり、「訂正すべき点の一つもない、完璧な文章」という意味ではないと考えられる。また2節・3節で述べた利点の他にも、添削ファイルがデータとして残ることで復習しやすく、翌日にさっそく添削された表現を応用した経験もあったことが分かった。そのことから毎回の課題の添削が授業時間内に提出しなければならないコメントペーパーや日常生活における日本語のサポートにもつながる可能性が考えられる。

次に教科書の日本語よりも「実際」の日本語を学ぶことができることが挙げられている。これについてアンケートで留学生が挙げていた例をここでも掲載する。

(13) 3. 高齢者に適当な仕事を与えること

(第4回2020年10月1日添削データ 下線筆者)

(13)' 3. 高齢者に適切な仕事を与えること

(13) は少子高齢化により生じる様々な問題への解決策についてのレポートの一部である。(13)にある「適当」と(13)'の「適切」について日本国語大辞典ではそれぞれ次のように記されている。

(14)「適当¹²」

- 2 ある状態・目的・要求などにうまくあうこと。ほどよくあてはまること。ふさわしいこと。また、そのさま。相当。
- 3 うまくその場を取り繕い、しのぐこと。また、いいかげんなこと。また、そのさま。

(15)「適切」

ぴったりとあてはまること。うまく適合すること。また、そのさま。

「適当」の持つ1つ目の意味は「適切」と同義であると考えられるが、「適当」には「いいかげんなこと」を表す意味があり、それが「適当」と「適切」の相違点であると言える。そのため(13)も誤用ではないが母語話者の内省から「適当」は「いいかげん」の意味で「適切」を「ふさわしい」の意味で用いることが多いと考え、Wordのコメント機能で以下のように補足説明をした。

- (16) 最近では「適当」は「いい加減」の悪い意味で使うことが多いので、「適当」よりも「適切」の方がより良いと思います。

(第4回2020年10月1日添削データ)

留学生へのアンケートではこのような教科書では学ぶことのできなかつた用法や母語話者の内省に沿った語彙選択を学ぶことができた点が課題添削システムの利点として挙げられていた。

また学部留学生の視点から課題添削システムの満足度を問うと5段階中5の評価で、日本人学部生が添削を行うことについては「日本語においては何十年も先輩であるため問題ない」との意見が得られた。

次にここまで取り上げられていない、添削を行ってみて筆者が感じた課題添削システムの利点についてみていく。

1つ目は添削をしていくうちに留学生の日本語の成長が見られやりがいを感じた点である。3節で取り上げられた誤用の改善だけでなく、はじめは助詞の誤用が多かったが、添削期間が終盤になるにつれ少なくなってくるなど留学生の成長が見られたこと

¹² 日本国語大辞典では「適当」とともに「的当」も記述されており、1はその意味であったためここでは取り上げない。

にやりがいを感じた。前述の表1からも分かるように元々課題添削システムにおける一回の作業時間が少ないことだけでなく、時間が経つにつれて添削する箇所が減っていくことで添削をすること自体の負担も軽減していったように感じた。このことは一人の添削者が同じ留学生を継続して添削する「マッチング方式」で行うことの利点であるとも考えられる。課題ごとに添削者が変わる場合、留学生の成長を感じることは難しい。それに対して一定期間は同じ添削者と被添削者で実施することで、学部留学生の間違えやすい文法の把握や以前の誤用をふまえて補足説明をすることができた。このようなやりがいを得られることは日本人学部生への大きな利点であると言える。

2つ目の利点は自分の使わない単語や表現を学ぶきっかけになった点である。今回は被添削者である学部留学生が中国語を母語としていたこともあり、日常的には用いない熟語や知らなかった二字熟語が添削本文に含まれていたことがあった。例えば第2回2020年9月24日には「隣家」という単語が使用されていたが、自らレポートを提出する際には用いない単語であったため現在でも使われる表現なのかを調べるきっかけになった。中国語を母語とする留学生でなくても、第三者の書いた文章を読むことで自分が課題に取り組む際には使わない表現を発見することができ、添削をする上で用法や意味を調べることは母語話者であっても学びに繋がると考える。

4-2 学部生からの意見

ここで学部生からの意見を取り上げたい。本稿では添削側を日本人学部生に限定することをふまえ2022年7月13日に当時点までの研究内容を学部生の前で発表する機会を得て、発表後アンケートを実施した。

アンケートは完全記述式で行い、対象は日本語教育学の講義を履修している日本人学部生23人で内訳は次の表3の通りである。

表3 学部生向けアンケートの回答内訳

学年	人数
1年	2人
2年	13人
3年	8人
全23人	

質問項目は「1. 研究発表を聞いて課題添削システムがあったら参加したいかとその理由」「2. 課題添削システムへの意見」の

2つで、ここでは1つ目の質問項目に対する回答を取り上げる¹³。「参加したい」と答えた学部生が16人、「参加したくない」と答えた学部生が4人、「すぐには参加せず、知識をつけた後に参加したい」「試しに参加したいが継続できるとは思えない」などの回答が3人であった。さらにその理由を「参加したい」と「参加したくない」に分けてまとめたものが表4である。

¹³ 2つ目の質問項目では研究発表をふまえ、学部生へのメリットに賛同する声が多かった一方で、課題添削システムの問題点であると思われる意見も得られた。それに関しては次節で取り扱う。

まず「参加したい」と答えた理由をみると、本稿で先に述べたような課題添削システムの利点に魅力を感じて参加したいと答えた学生が多くいることが分かる。その他にも、日本の大学に留学し日本語の課題を提出していることからすでに一定レベル以上の日本語能力を有していると考えられたため、筆者が添削作業を行った際にはすべて日本語でやりとりを行ったことから、英語や第二外国語に自信のない学部生にとっては魅力の一つになったと考えられる。さらに実際に留学経験のある学生は自分の経験をふまえ、留学生のおかれた状況に共感し課題支援に参加したいと考えていること、また分野によっては新たな解釈の発見に繋がる可能性があることも分かった。

次に「参加したくない」と答えた理由をみると、時間的理由でサポートが難しい学生がいること、自分の日本語能力に自信がなく添削が不安である学生や課題の締め切りを厳守できるかどうかの不安がある学生がいることが分かった。

本アンケートは日本語教育学の講義で実施したものであり、回答した学部生は少なくとも日本語学・日本語教育学に関心のある学生であることは考慮しなければならないものの、課題添削システムに関心を持ち「参加したい」と答えた学部生が約 69.5%であったことから、今後さらに課題添削システムの研究を進め発展させていく意味はあると考える。

5. 課題添削システムの問題点

ここまで課題添削システムの利点や実施して得た手ごたえなどをデータや経験をもとに述べてきたが、実際には問題点や改善すべき点も明らかになった。

まず課題添削システムにおけるシステム上の問題点としてはマッチングの方法が挙げられる。日本人学部生と他大学の学部留学生がマッチングするには大学の教師からの紹

表4 1つ目の質問項目に関する理由一覧

「参加したい」と答えた理由一覧
・時間的自由度が高いから
・日本語でやりとりが可能だから
・留学生に対する支援の必要性が高いから
・無償であることにより「留学生を手助けしている」という精神的充足感を得られるから
・日本語教師を目指しているため、添削の経験が分かりやすい伝え方の勉強になるから
・外国人との交流の機会として参加しやすい
・同じ専門（文学）の留学生の添削をすることで新たな解釈の発見があるかもしれないから
・日本語教育に関する新たな学びが卒業論文のテーマに繋がるかもしれないから
「参加したくない」と答えた理由一覧
・自分の日本語能力に自信がないから。
・課題の提出期限を過ぎて添削をしてしまうかもしれないから。
・他の人の添削ができるほど自分の生活に余裕がないから。
・添削の時間があるならばアルバイトや自分の課題に割きたいから。

介などが必要であり、現段階で学部留学生または日本人学部生に課題添削システムへの参加意思があったとしても自分で相手を見つけることは難しい。学生が自らマッチング相手を見つけられないことは今後課題添削システムを構築していく上で参加者を集める際の課題となると思われる。また母語話者であっても専門用語を多く含むような文章を添削する場合には、文脈が掴めずその用語について調べる必要性が生じるなど、添削者への負担になる可能性も考えられるため、専門分野の近い学生同士でマッチングできるようにする必要があると考える¹⁴。

その他にも課題添削システムは先に述べたように大学教員からの紹介などを通して学生同士がマッチングして行うものである一方、添削期間中に第三者が介入しチェックを行うことがないためどちらかにとって不快となるようなことが起こると継続は難しくなる。そこから課題添削システムは日本人学部生と学部留学生どちらも協力してはじめて成り立つ制度であると言える。また先に述べたような利点も積極的に学びに繋げようとする姿勢がなければ得られないものである。村田・池田（2019）では、日本語教育におけるアカデミックライティングの指導と大学等におけるチューター制度との連携について次のように述べられている。

自律した書き手としてレポートや論文を書くためにはまとまった長さの文章を作成した後で、間違いがないか推敲し、修正する力を身につけることも必要

（村田・池田 2019 : 10-11）

ここでの「自律した書き手」とはアカデミックライティングやチューター制度などの支援なしに、レポートや課題などにおいてストラクチャーに沿って論理的な文章を書くことのできる書き手を意味する。課題添削システムでも同様に学部留学生が「自律した書き手」になることを最終的には目指していきたいが、一方で現段階では学部留学生、添削者どちらに対しても個人の学習意欲によって左右してしまう部分が多いことが問題点である。添削者側も日本人母語話者であれば誰でも留学生の文章を添削できるわけではない。ある程度の添削や日本語学・日本教育学の知識¹⁵はもちろんのこと、責任感を持って留学生の課題の添削に取り組み、そこから学びを得ようとする意欲がなければ課題添削システムは意味をなさないと考えられる。これらのことから課題添削システムを実施する前に添削側・被添削側どちらに対しても注意事項の配布や、期間終了後のアンケートの実施などを通して参加者へのルールについても検討していく必要があると考える。

¹⁴ マッチング方法に関しては、「マッチングアプリ」のようにアプリケーションにすることで容易にできないかと考えてはいるものの、現段階ではその分野の知識が足りず現実的ではないため今後の課題としたい。

¹⁵ どの程度の事前知識が必要かについては今後さまざまな学年や専攻の生徒で実施していくことで明らかになると考える。

次に現在の 1:1 の添削体制に対して、実際に課題添削システムを経験した学部留学生から「学部留学生 1 人に対して添削者を 2 人にする 1:2 での添削の方が添削に偏りが生じないのではないか」という意見が得られたことを取り上げたい。これに関しては日本人学部生を対象に行ったアンケートでも「参加したくない」と答えた学部生の中に「1:2 での添削ならば検討するかもしれない」と回答した学部生が 2 名いた。その理由としては「1:1 だと課題の締め切りを過ぎてしまうかもしれない、間違った日本語を教えてしまうかもしれないなどのプレッシャーがあるが、1:2 ならばそのプレッシャーが軽減されるから」と回答されていた。そのことから今後は 1:2 で課題添削システムを実施し、今回の 1:1 での実施と比較して検討を行う必要性があると考えられる。

最後に日本人学部生に対して行ったアンケートの 2 つ目の質問項目であった「課題添削システムへの意見」で問題点・懸念点として挙げられた添削者の人員確保について取り上げたい。本稿では添削者を日本人学部生としているが、日本語学や日本語教育に関心のない学部生は魅力的に感じないのではないかという意見が得られた。それに対する改善案としてマッチングさせる学部留学生の母語を日本人学部生の学んでいる第二外国語などにすることで、お互いに添削し合えるようにするという案が挙げられていた。確かにそうすることで日本人学部生も学ぶ機会を得られる一方でそのような制限を設けることがマッチングの成立率を減少させる恐れもあるため慎重に検討する必要があると考える。先に述べたような 1:2 の添削での研究を行うためにも人員確保が重要になってくるが、現段階ではまずは課題添削システムに関心の高い学生を対象にさまざまな条件下で研究を進め、システムとして確立させることを第一にしたいと考えている。

本節で述べたものの他にもさまざまな細かい問題点・改善点が挙げられたが、課題添削システムはそれだけで学部留学生をサポートしようとするものではなく、既存する留学生支援制度と連携することで毎回の課題を支援しようとするものである。そのため課題添削システムだけでは補えない部分も、既存の支援制度と併用することで補える可能性もあると考え、今後の課題としたい。

6. まとめ

今現在多くの大学で取り入れられている留学生支援制度である「チューター制度」「アカデミックライティングのサポート」「奨学金制度」では学部留学生の毎回の課題を添削し、フィードバックを行うことは難しい。そのため新たに毎回の授業課題のサポートに特化した「授業課題添削支援システム」を提案しその構築の可能性について述べてきた。様々な問題点や改善点が見つかったものの、実際に課題添削システムに参加した学部留学生からは高い満足度を得られ、実際のデータからも日本語における成長が見られた。本稿では添削側を日本人学部生に限定することで課題添削システムにおいて日本人学部生が学部留学生を支援することの可否について検討を行ってきたが、学部留学生からも「問題ない」という意見が得られており、一定期間の課題添削を通して学部留学生に日本語の成長が見られた点からも日本人学部生が添削者となり学部留学生を支援

することは可能であると言える。さらに日本人学部生の学びにも繋がることから、日本語学・日本語教育学に関心のある学部生を中心として今後研究を進め、最終的には「チューター制度」や「アカデミックライティングのサポート」などに並び大学における留学生サポートの一環として構築されることを目指していきたい。

参考文献

- 小林浩明 (2007) 「チューター制度の改善と留学生アドバイジング」『北九州市立大学国際論集』5, 北九州市立大学国際教育交流センター, pp.53-62
- 瀬口郁子 (1993) 「神戸大学におけるチューター制度の現状と課題」『神戸大学留学生センター紀要』1, 神戸大学留学生センター, pp.47-60
- 田口陽子・吉田聡宗・大角洋平・吉田真悟 (2020) 「留学生のためのチューター制度の現状と課題：論文チュートリングの改善にむけて」『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, 一橋大学国際教育交流センター, pp.17-30
- 田中共子 (1996) 「日本人チューター学生の異文化接触体験：ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己の成長を中心に」『広島大学留学生センター紀要』6, 広島大学留学生センター, pp.85-101
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』株式会社小学館
- 村田晶子・池田幸弘 (2019) 「日本語教育におけるアカデミック教育の役割：専門領域、チューター制度との連携を目指して」『法政大学教育研究』10, 法政大学教育開発支援機構 FD 推進センター, pp.5-18
- 八重澤美知子・橋本哲哉・加藤和夫・桜田千采・高井陽男・谷口進一・中根和昭・太田秀樹 (1993) 「パネルディスカッション「留学生をめぐる諸問題について」から：チューター制度について」『金沢大学留学生教育センター紀要』2, 金沢大学留学生教育センター, pp.99-102

参考サイト

- 文部科学省 (2022) 「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」 (https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_gakushi02-100001342_2.pdf)
- 文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室 (2021) 「留学生交流に係る最新状況と令和3年度関連予算案について」 (https://www.mext.go.jp/content/20210326-mxt_gakushi02-000013769-01.pdf)

(埼玉大学教養学部生)